［地域総研紀要　7巻1号, P73－78（2009）（研究ノート）］

ド・ロ神父の外海での活動の研究意義*

佐藤快信**、入江詩子**、菅原良子**、鈴木勇次**

The research meaning of the community development of The missionary in Sotome

Yoshinobu Sato, Tomoko Irie, Yoshiko Sugawara, Yuji Suzuki

キーワード：経済開発、社会開発、人間開発、ド・ロ神父、外海

概　要

ド・ロ神父は、1914年に死ぬまで一度も故郷に帰ることなく、私財をなげうって生涯を長崎県外海町の貧しいカトリック信徒たちのために捧げた。その活動は多岐にわたり、印刷・出版事業、教会建築、開墾、道路工事、防波堤建築などの土木工事、社会福祉施設事業、医療・救護活動、本来の布教・司牧活動などがある。

彼の活動を地域開発の視点でみたときに、どのような評価ができるのか、その課題を提起した。

はじめに

日本が近代化を目指す契機となった明治維新は、それまでの幕藩体制から中央官制、法制、身分制、地方行政、金融、流通、産業、経済、教育外交、宗教政策など多肢に及んだ。そして、日本をアジアで最初の西洋的国家体制を有する近代国家へと変貌させた。明治維新の諸改革は、新たな制度で生じた矛盾をはらみながらも、短期間での立憲制度を達成し、富国強兵が推進された。

新しい制度のなかで変革が全国規模で進むなかで、西の地方の貧困にあえぐ小さな農魚村で地域開発に取り組んだ人がいた。彼は、マルコ＝マリ・ド・ロッソ（Marc-Marie de Rotz）神父（以下ド・ロ神父）といい、1940年にフランス国カルヴァドス県ヴォスロール村で誕生し、1868年に日本の長崎に来日以来、1914年の生涯を終えるまで日本で布教活動をした神父である。

彼の来日してからの活動は、大浦天主堂に石版印刷所を開設、1871年に横浜で石版印刷所を開設、横須賀造船所の外国人小聖堂司祭を兼務した。1873年には、再び長崎に戻り、1875年には長崎大浦ラテン神学校建設をした。そして、1879年に外海教区に赴任し、以来私財をなげうって外海の貧しいカトリック信徒たちのために生涯を捧げた。その活動は、印刷・出版事業、教会建設、開墾、道路工事、防波堤建築などの土木工事、社会福祉施設事業、医療・救護活動、そして本来の布教・司牧活動など幅広いものであった。確かに、彼の偉業を布教のためにしたことといってしまうこともできるが、彼一人の力によってしてきた功績を現代の地域開発の視点でみたときに、改めてその偉大さに気づかされる。

そこで、本報告では、その活動は経済開発や社会開発、人間開発の要素を含んでいる可能性があり、これまでの彼の生涯や福祉事業に焦点を当てた文献資料とは違う地域開発または開発援助の視点で研究する上での課題を提起することにした。

1．ド・ロ神父に関する資料

ド・ロ神父について書かれた書物は、表1.のとおりである（2008年12月現在）。

「外海町誌」のなかに記述されているものは、片岡弥吉氏が執筆したものである。その後の資料は、片岡氏の「ある明治の福祉像－ド・ロ神父の生涯」を基に執筆されているものが多く、ド・ロ神父の資料としての定番的存在となっている。そのため、彼の生涯の活動、特に福祉事業に焦点を当てた文献資料が多い。

表1．ド・ロ神父関連資料一覧（書籍）

	書　　名	著　　者	発　行　所	年
1	外海町誌	外海町	外海町誌	1974
2	ある明治の福祉像－ド・ロ神父の生涯	片岡弥吉	NHKブックス	1977

* Received January 31, 2009
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　地域づくり学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

3	外海 SOTOME	外海町　企画編集製作	外海町	1983
4	ド･ロ神父の出津(シツ)の娘たち	岩崎京子・田代三善	旺文社創作児童文学	1985
5	ドロさま小伝(第２刷)1994年版	江口源一	自費出版	1993
6	マルコ・マリ・ド・ロ神父小伝	ド･ロ神父記念館編集	聖母の騎士社	1995
7	長崎県福祉のあゆみ	長崎県社会福祉事業史編集委員会　編	長崎県 ｐ.82－118	1997
8	神父ド・ロの冒険	森　礼子	教文館	2000
9	外海（ソトナ）の聖者ド・ロ神父	谷　真介・矢車　涼	女子パウロ会	2000
10	日本の幼児保育につくした宣教師(上巻)	小林恵子	キリスト教新聞社	2003
11	「ド・ロ神父小伝」 『日本列島を往く (6)　故郷の山河で』	鎌田　慧	岩波現代文庫 ｐ.250－263	2005
12	ド・ロ神父黒革の日日録	矢野道子	長崎文献社	2006
13	外海キリシタン年表	外海町編者	外海町	

ド・ロ神父について書かれた論文は、表2.のとおりである（2008年12月現在)。

表２．ド・ロ神父関連資料一覧（論文）

	タ　イ　ト　ル	著　書	雑誌名	発行所	№.	ページ	年
1	長崎でド・ロ神父が設立した「出津保育所」：日本で最初の保育園ではなかろうか	小 林 恵 子	日本保育学会大会発表論文抄録	日本保育学会	51	336－337	1998
2	カトリックの果した先駆的な児童福祉施設：長崎の「浦上十字会」とド・ロ神父を中心に（その２）	小 林 恵 子	日本保育学会大会発表論文抄録	日本保育学会	52	224－225	1999
3	伝統と技術革新とマルコ・マリ・ド・ロ神父の茶への功績	二 村　悟	茶	静岡県茶業会議所	12. 60	48－52	2007
4	長崎市・旧出津救助院授産場での製茶作業	二 村　悟	日本建築学会技術報告集	日本建築学会		25	2007
5	キリシタン時代の社会福祉とド・ロ神父	結 城 了 吾	メディカルレコード		11. 3		

２．ド･ロ神父の外海における社会開発

前節の資料を基に、ド･ロ神父の年表の概略を作成したのが、表３.である。彼は、28歳のときに日本　長崎に来て、以来日本を離れることなく、74歳の生涯を終えた。外海には39歳のときに赴任し、生涯を終えるまでの35年間をすごしたことになる。人生の約半分を外海とそこにすむ信者に生涯を捧げたことにもなる。

1879（明治12）年外海の出津に赴任し、復活した貧しい信徒たちを霊的、物質的に救った。同年授産場を設けて織物、染色を教え、1883（明治16）年には救助院を設けて製粉、機織、裁縫、そうめん、パン、醤油、搾油技術、日記、算術を教えた。1886（明治19）年には聖ヨゼフ修道院と、俗に女部屋とよばれた伝道婦養成所を設けた。現在のお告げのマリア修道会の前身である。貧農の青年には農業の近代化を図り、水車による製粉、農業機具の改良、原野の開墾、イワシ網工場や堤防建設も行った。明治18年には診療所を設立し、薬局も置いた。建築家としても優れ大浦天主堂司祭館の屋根裏部屋の改造、旧ラテン神学校（重文指定)、出津、大野教会などを建設した。ド・ロ神父が外海町において為しえたことは、福祉事業としてとらえることもできるが、授産事業など地域を総合的に開発する地域開発としてとらえることができよう。

ド･ロ神父が外海に赴任した時の心境を片岡は、「ド･ロ神父がここに来て目にしたのは、ノルマンディのおおらかなボカージュの平野とは対照的な段々畑で夫や、働き手の息子を失った妻や母、仕

事を持たない娘たちが少なからずいた。ド・ロさまは、この人びとに仕事を授け、自立する力を身につけさせようとする愛にかり立てられ始める。福祉事業はただ金をやったり、衣食住を提供してやればよいというのではない、それだけでは被救護者の人間性をダメにしてしまう。自力で生きゆく道をひらいてやることが大切なのだ。ド・ロさまは、貧しい人びとに自活の道を見出させるために、青年訓練所や授産場（救助院）を設ける。ド・ロさまのその精神は、父ノルベールから少年のころたたきこまれたものである。」[1]と記述している。このことは、福祉事業のあり方について重要な示唆を与えるものであるが、地域開発における自立は何を意味するかという点でも示唆を与えている。それは、自立は経済的自立を意味していることである。現金収入を得るために、婦女子に対しては織物、染色、裁縫という服飾による収入、男子には農業に西洋の近代農業の技術の導入、漁業では漁法の改善というような生産性を高めることをおこなっている。それは、第２次世界大戦以降の開発途上国に対する国際援助・協力の姿と似ている。

また、「教育が人間をつくる。教育の大切さをド・ロさまは身にしみて知っていた。明治10年「智慧明ケ乃道」を出版して婦女子にも読書をすすめたのもそのためであった。･･･ド・ロ神父が明治12年外海に赴任して先ず考えたのは学校設立であった。」[2] とも記している。経済的開発だけでなく、人間形成に関わる教育の重要性も認識しており、人間開発の視点も存在していた。

ド・ロ神父の偉業を布教のためにしたといえば確かにそうかもしれないが、現代の地域開発の視点にたってみれば、経済開発と社会開発の両者を備えた地域開発といえるだろう。

３．経済開発と社会開発

第２次世界大戦が終わって、旧植民地が独立した1960年代以降30年以上にわたって「開発援助」による資源投入（資金投入、技術移転、物質の贈与など）がおこなわれてきた。開発の本来の目的であった貧困削減の戦略は「経済成長」によるパイ（国家の経済的富裕度）の拡大が重視され、社会が経済的な成長を遂げれば、その経済的な資源は増加し、国民の取り分もそれに応じて増えるはずであるという想定に基づき、経済成長を直接目標とすることによって、間接的貧困削減が達成されるというシナリオが暗黙裡に合意されていた[3]。一般に、経済成長はめったに大衆にまでトリクルダウンせず、自由市場機構は配分の効率にとって必要不可欠かもしれないが、分配の公正を保証するものではない[4]。そのため、貧困削減が進んでいないという認識が先進国や途上国を問わず開発に関わる人々の間に共有されるようになると、これまでの「経済成長による間接的な生活の向上」ではなく、貧困削減を「直接の目標とする取り組み」が必要であるとの合意ができた。これに応じてパイの拡大に代わってパイの分配に注目する戦略が注目され、「成長」を志向する「経済開発」

表３．ド・ロ神父の年表概略

1840	天保11	フランス、バイユ市役所に出生届
1860	万延元	オルレアン神学校に入学
1867	慶応２	パリミッション会に入会
1868	明治元	マルセイユを出発、長崎上陸。
1871	明治４	横浜へ
1873	明治７	長崎に戻る
1874	明治８	薬局開始、子部屋、女部屋開設。
1879	明治12	外海に赴任。救助院、女部屋開設。
1880	明治13	福祉活動に専従
1881	明治14	イエスのみ心聖堂着工
1882	明治15	医療救護活動開始
1883	明治16	授産場設立、保育所併設。
1884	明治17	変岳大平開墾開始
1885	明治18	鰯網工場建設、製粉場、水車小屋設立 出津浜漁港整備、砥石崎防波堤築工
1886	明治19	診療所設置。北松田平横山野買収。
1887	明治20	大村に少年教育施設建立。
1890	明治23	農漁業奨励
1891	明治24	黒崎村所持救助院設立
1893	明治26	大野教会ド・ロ壁建立 出津-瀬戸間県道工事に金銭・労力援助
1894	明治27	空梅雨に食糧援助、人夫支援（～1895）
1895	明治28	浦上天主堂創建に金銭、技術援助
1898	明治31	野道に教会墓地造成
1901	明治34	神浦上水道新設に協力
1909	明治42	出津教会玄関部拡張
1910	明治43	フランスから大十字架取り寄せ
1911	明治44	大浦に転地療養
1914	大正３	足場から落ち、療養中帰天

に対して「分配」を志向する「社会開発」への関心が高まった[5]。

社会開発への関心は、国連機関で1950年代から存在しており、アジア・アフリカ諸国の多くが独立を果たした1960年代以降に展開された社会開発の重要な問題は経済開発との関係にあり、両者の均衡という考え方が示されてはいた。しかし、先に述べたように経済成長重視の戦略の中では社会開発は経済開発のためのインフラを提供する補完的立場であった[6]。しかし、経済成長では貧困削減が思うように進まないなかで、1995年のコペンハーゲンでの「国連世界社会開発サミット」以降、社会開発は経済開発と同等かそれ以上の重要性を持つ開発戦略として浮上してきた[7]。

また、1990年代以降、社会開発が途上国の開発、開発協力の中心課題として受け入れられていく過程の中で大きな影響を与えたのが、国連開発計画（UNDP）などが主導した「人間開発」「人間の安全保障」の考え方であった。人間開発は、社会開発と重なり合う部分が相当あり、人間中心主義という共通性を持つ。しかし、両者は同じではなく、社会開発はあくまでも人間の再生産に焦点を当て、物質の生産そのものは一般に考察の対象としない。人間開発は、それ自体で生産、再生産を包含する全体論的開発で、福祉、社会的安全網、教育、保健は人間開発の側面だが、それらは全体の中の部分であり、人間開発は開発モデルのあらゆる側面（経済成長、貿易、貯蓄、投資）を視野に入れる。人間開発論は、経済成長第一主義を批判するが、成長そのものを否定しないし懐疑的な立場をとるわけでない。これまでの開発戦略がGNP、貯蓄、投資、国家歳入というマクロ指標の目標値からはじめるのに対して、まず人間の基本的なニーズ（栄養、教養、保健、住宅、交通）で計画目標を表すべきだとする考え方は、基本的人間ニーズ戦略を受け続くものであった[8]。

まとめ

ド・ロ神父に関するこれまでの文献資料は、彼の生涯に関する伝記的なものや慈善的福祉事業に焦点をあてたものが多く、地域開発または開発援助の視点で彼の活動を評価したものはない。開発援助の視点に立てば、彼は明治期の近代化の進んだ先進国から近代化の遅れた日本、それも日本の西端にある長崎の貧しい村に定住しながら、多額の私財を投入し、授産事業、福祉事業、土木事業などの他分野にわたる地域開発を外部者として関わりながら活動してきたといえる。

そこには、開発プロジェクトの流れが慈善型→技術移転型→参加型と変化してきた現在の開発プロジェクト[9]のどこにあてはまるのか、経済開発と社会開発のバランスはどうであったのか、人間開発的側面での評価はどうなのかという疑問を提起する。また、開発に投資された額はどれほどでどのような効果があったのかという貧困対策としての授産の位置づけ、農業技術の改善による農業生産への影響などの疑問も湧いてくる。さらに、彼の偉業が１世紀を経た現在の外海にどのような痕跡を残しているのかという興味関心も出てくる。

本研究は、資料集めという段階にあるが、前述した課題を解決しながら、①外部者が地域へ関わることの地域への影響、②地域開発における教育の影響、③貧困対策としての授産の位置づけ、④コミュニティ形成への影響、⑤ジェンダーの視点による地域開発の評価、⑥人間福祉的視点による評価について、キリスト教の宣教師と信者達という関係性のなかでの活動の評価は、信仰という課題を乗り越えられるかわからないが、目指してみたい。

※本研究は、長崎ウエスレヤン大学　地域総合研究所　採択研究2008B2「明治期における宣教師による社会開発の意義について－外海町ド・ロ神父を事例に－」によった。

注）

1　片岡弥吉、「ある明治の福祉像－ド・ロ神父の生涯」、日本放送出版協会、ｐ.114-115、1977年。

2　同上、ｐ.144-145.

3　佐藤寛、「社会開発に込められる多様な期待」、『テキスト社会開発』、日本評論社、ｐ.1－2、2007年。

4　西川芳昭、「日本の有機農業を開発途上国に伝える意義」、『有機農業と国際協力』、コモンズ、ｐ.11－12、2008年。

5　佐藤寛、「社会開発に込められる多様な期待」、『テキスト社会開発』、日本評論社、ｐ. 2、2007年。佐藤は、分配の対象となるものは、単なる経済的便益だけでなく、政治参加の機会へのアクセス、社会的な権利などを含むさまざまな「資源」としている。

6　佐藤誠、「社会開発とコミュニティ・国家・国際社会」、『社会開発論』、有信堂高文社、p.5、

2003年。
7　佐藤寛、「社会開発に込められる多様な期待」、『テキスト社会開発』、日本評論社、ｐ．2、2007年。
8　佐藤誠、「社会開発とコミュニティ・国家・国際社会」、『社会開発論』、有信堂高文社、p10－11、2003年。
9　田中治彦、『国際協力と開発教育』、明石書店、p.5、2008年。